

石巻ひまわり訪問看護ステーション矢本サテライト

症例概要 利用者:70代 男性

利用期間:平成 29 年 5 月～現在

疾患: 腎臓癌肺転移 腎臓癌胸椎転移 下半身麻痺

経過:上記疾患にて抗がん剤治療実施。在宅での生活を希望され退院し自宅で療養しつつ加療継続することとなる。排便コントロール、褥瘡処置行いながらリハビリも実施。ADLの拡大も見られたが、H30年12月に腰痛の悪化あり胸椎転移の増大指摘される。入院加療するが抗がん剤の副作用も強くご家族と相談し緩和ケアに転向。往診医に変更し在宅での療養となる。

内 容

平成 29 年 5 月より訪問看護が開始となりました。訪問開始時は、入院中の精神的な不安定さや食欲不振、仙骨部の褥瘡、便秘症、身体機能の低下などが見られており、奥様の介護負担、経済的な負担も大きい状態でした。しかし、奥様、看護師、訪問入浴、ヘルパーが協力して皮膚状態の改善に努め、徐々に褥瘡改善し、食欲も戻ってきました。

全身状態が安定してきたことで、訪問リハビリも開始となりました。自力での歩行も可能となり、もともと好きだった畑仕事や草取りを行い奥様も安心して仕事に行けるようになった矢先、平成 30 年 12 月に腰痛悪化し、歩行困難となりました。胸椎転移の増大が指摘されて再入院となりました。入院中は抗がん剤の副作用で、体中の湿疹・掻痒、疼痛等が生じ、不穏症状も強くなっていました。その為、治療の為に身体抑制が必要な場面もあったそうで、奥様はこのまま苦しい治療を続けていいのか、非常に迷われていたそうです。

そんな時、ケアマネージャーを通じて訪問看護師へも相談が持ち掛けられました。看護師は、奥様の悩みを傾聴しつつ、苦しい抗がん剤治療ではなく、在宅での緩和ケアも一つの方法である事や、在宅生活での心配事などについて、丁寧にアドバイスしました。

結果、奥様は在宅で介護していくイメージがついたそうで、抗がん剤の治療を中止。奥様とご本人の希望で往診医に変更し在宅での緩和ケアに移行しました。平成 31 年 2 月に自宅に退院された時は、ベッド上寝たきり状態で、食事摂取も介助の状況でした。不穏症状や抗がん剤治療の副作用によ

る搔痒感も強く、往診医と相談し内服、軟膏のコントロールを、訪問入浴とも協力して行いました。また、疼痛に対しては、医師と共に麻薬の調整を行いました。

結果、疼痛のコントロール良好となり、皮膚状態も改善が見られました。訪問リハビリも再開となり下肢の拘縮も徐々に改善し、おむつ交換もスムーズに出来るまでになっています。

様々なサポートを受けながら、全身状態の管理、在宅での生活が安定して過ごせている事で、現在では、文字を書いたり新聞の音読を行うなど、生活の質の面でのリハビリ、自主トレーニングにも取り組めるようになりました。奥様は退院後、全身状態や身体機能の維持の面しか考えられなかったが、徐々に、人として生活を楽しむ事への視点も持てるようになってきたとのお言葉を頂いています。

退院時の予後 2~3 か月との診断でしたが宣告された予後とうに過ぎ半年となりました。病院では抑制が必要なほどせん妄が強かったですが現在は必要ありません。様々な職種が協力し、サポート体制を整えることで、住み慣れた環境での生活が継続出来、ご本人の心理的側面に大きな変化をもたらした事例です。ご家族からも「ひまわりで本当に良かった」との言葉をいただきました。今後もご本人ご家族の QOL を考慮した関わりを続けていきたいです。